

---

# 届き先のないラブレター

桜桃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

届き先のないラブレター

### 【Nコード】

N1744V

### 【作者名】

桜桃

### 【あらすじ】

ある日、名前も知らない女の子をはじめて好きになった女たらしの胡桃一樹。

一途に恋をするが、彼女には彼氏がいて

名前も知らない女の子。

カフェで知り合った女の子。

そんな彼女に俺は恋をした。

届き先のないラブレター

「おいおい、また女の子を泣かせたのかよ。」

「しらねえよ。」

「あゝあ、いいねえ。モテる男は女なんか選び放題だもんな。でも、俺の彼女は取るなよ。」

「しらねえよ。」

俺は胡桃一樹。

米花高校3年生。

小さい頃から目立つ容姿なもんで、女には言い寄られるタイプだ。  
付き合った女の数は数え切れぬほど。

しかし、初恋はまだだ。

「本気で好きな女とかいねえのかよ、一樹。」

こいつは斉藤龍介。  
俺の親友。

「さあな。美人で優しくて気立てがよくて、料理も上手で  
ナイスバディなら文句なしかだけ。」

「こんのヤロー！」

「まあ、怒るなっつーの。  
そんな女、漫画にしか存在しねえから。」

「だよな。」

アイスコーヒーを一口。

「お、おいつ性格はどうかしらねえけど、

お前がさつき言った女に当てはまりそうなのがいたぜ。」

「はあ？」

「美人で気立てがよさそうで、スタイル抜群！」

何気なく目をやると、

そこには黒髪の長い髪。大きな目がぱっちりとしてて、

確かにスタイル抜群……って何で俺がこんなこと言ってんだよ……。

「彼氏とかいんのかなあ。」

「おい、お前彼女いるだろ。」

「それはそれ。あれはあれだっ」

「おいおい……」

そんなんでいいのか？

こいつの彼女は、勘違いは良くするし、嫉妬深い。  
変な勘違いされたら、こいつ生きて帰られるのか？

「やっぱ、誰かを待ってるっぽいし。」

携帯なんかチラホラ見てさあ、ため息なんてしてるし・・・  
やっぱ、彼氏いんだな！。って・・・一樹？おい。」

「・・・」

「おいって・・・まさか、一目惚れか？お前・・・  
あの、お前が・・・」

「・・・」

「い、一大事だ・・・  
一樹、戻って来い！女たらしのお前に、戻ってくるんだ！」

「・・・バツなに大きな声で言ってるんだよ！」

さっきの女の子まで目を見開いてこっちを見る。

「女たらしってなあ・・・」

「だって、そうだろ？」

「目ぼれなんてお前らしくねえよ。」

「目ぼれ？誰が。」

「お前しかいねえだろ。」

「何言ってるんだ。」

「まっ、恋をしたことのない一樹君にはわからぬことだよな。  
ごめんごめん、大人にはわかる……」

「ふざけるな。」

「スンマセン。でも……一樹、絶対あの女の子に心を奪われたね。」

俺はこれ以上何もいえなかった。

確かに、そうかも知れないと思ったから。



「おいおい、まだこねえのかよ、彼氏。」

「あれから3時間は経ってるぞ。」

「うっわー。もしかして彼氏、社会人じゃね？  
ってか、高校生なのかな、あの子ー。」

「さあな。」

すると、茶髪の女の子が黒髪の女の子に近寄る。

「蘭！？あなた、こんなところで何してんの!?!」

「えっ？園子!どうしたの?」

「それはこっちの台詞だって!」

私は姉キと約束してて……まさか、新一君にデートすっぽかされた!?!」

「ううん。違うの……ほら、いつもの……」

「ったく、女房ほったらかしにして、何してるのよ!?!」

「いいよ……だって、私はそういう新一を……好きになってしまったんだから。」

「蘭……あなた、本当に健気よ!?!」

ひしっと抱きつく。

3つ、わかったことがある。

1つは彼女が『蘭』という名前ということ。

2つは彼女の彼氏が『新一』ということ。

3つは彼女をその彼氏はほったらかしにしているということ。

「あ……姉キが来た……」

ゴメン、本当は新一君が来るまで一緒に居てあげたいけど……」

「ううん、いいよ。ありがとう。」

「ごめんね！じゃあ、明日学校で……！」

「うん。」

学校でということとは、学生……だな。

「彼女、かわいそうだな。」

「……」

「一樹？」

初めて感じたこの感情。

恋をしたことのない俺は、衝撃的だった。

2  
週  
間  
後

「あの子どうしてっかなあ。」

帰り道、突然こいつが言う。

たしかに、俺の脳裏にこいびりついて離れない彼女の悲しそうな笑み。

「なあ、一樹。一樹？」

はっは一ん、これは重症だな。完璧彼女のとりこだろ。

いやあ、女たらしのお前が・・・ここまで成長するなんて父ちゃんは嬉しいぞ！」

「いつから親父になったんだよ、お前は・・・。」

「ははっ・・・って、あれ・・・工藤新一じゃね!？」

「工藤新一い？」

「一樹しらねえの!？まあ、テレビとかあんま見ねえもんな。すごい有名な探偵だよ。」

俺らと同年。たしかうちの女子が言ってたけど、容姿端麗、頭脳明晰、スポーツ万能、優しく、紳士的であんな完璧な男はいねえって話だぜ！」

「へえ・・・。」

「まあ、一樹の場合、工藤新一から頭脳明晰と優しく紳士的の部分を

取るべきだな。」

「うるせえよ。」

「でも、すっげえ感動的！俺、ファンなんだ。」

「ファンってなあ……。」

「でも、ここ宝石店だぜ？さっすが金持ちは違う。」

「金持ち？」

「工藤新一の両親は世界的に有名なんだぜ？」

父親は推理小説家の工藤優作、母親は元銀幕のスター藤峰有希子  
！」

工藤優作……ああ、うちにある小説の……

藤峰有希子つつつたら、親父のDVD箱にある女優じゃねえか……。

「ゆ、指輪！！あいつ、指輪買ったぞ！！  
すっげえ！！」

ダイヤモンドってことは、婚約指輪！？  
すげえ、すげえ、衝撃的！！」

1人で興奮してろ……

「誰と結婚すんだろうな・・・」

「工藤新一くらいになったら、あの女の子くらいかなあ。」

ぴくっ

「工藤新一は浮気しねえし、女たらしじゃねえし。」

「それ、俺のことか？」

「あ、バレた？」

思いつきりこいつを殴った俺は再び歩いた。

「一樹、レストランで食事よ。食事。」

「は!?!」

「お父さんが今日、早く帰ってくるみたいだから。」

「へえ……」

「あの子も誘いなさいよ。ほら、丸坊主の……」

「龍介?」

「そうそう。」

「わかった。電話する。」

いつも帰りが遅い親父が今日は珍しく早いらしい。



それだけでご機嫌だもんな、この母親は。

電話すると、龍介は迷いなく、『行く。』と言った。

「遠慮というものしらねえのか。」

『お前に遠慮なんてしてらんねーよ!』

「オオじりと酷いこと言っな。」

『じゃ、今からダッシュでお前ん家いくから!』

ッピ

きれる。

なんなんだ、アイツ……。

「レストラン」

「高そうなところっすね。  
いいんですか？おばさん。」

「いいのよっ友達のいない一樹がいつもお世話になってる  
龍介くんだもの。少しはお礼しとかなきゃね？」

「ありがとうございます！」

よく言っよ・・・

名前忘れていたくせに・・・。

「お父さんはあとで来るから、少し待ってましょ？」

「あーい・・・。」

瞳を輝かせて龍介は中に入る。

席に座ったその瞬間、「キヤー！！」と甲高い声が響き渡った。

口々に叫ぶ声。「殺人事件だ！」「死体がある！！」

という声。

龍介は青ざめながら「さっ・・・じん・・・」とつぶやく。

そっいや、コイツ殺人とか無理だったな・・・。

「工藤新一が駆けつけたらしい！」

「マジかよ!!」

という客の声に隆介は「ええ!?!マジかよお!!」と瞳を輝かせる。

嫌いな殺人も工藤新一にかかればいちころって・・・

コイツ、大丈夫かよ・・・。

「あ、一樹！あの女の子だ。」

「え！？」

窓をポーッと見ながら座っている彼女。

確かに見覚えのある彼女。

「運命的な出会いじゃね！？

きつと、彼女も家族で食事してんだよ！  
帰り、話しかけてみれば？」

「何々？一樹の彼女？」

「違いますよー！もう、ただの片思い！！」

「龍介！！」

「あら。彼女が沢山いるって聞いたもんだから。  
彼女かと思っただわ。」

「あんたもお父さんに似て、プレイボーイだから。」

「初恋ですよ、初恋！」

「龍介は黙ってる！！」

俺は顔を赤くさせて龍介に言う。

「はい」なんて反省の色も見せない龍介。

「あ、事件・・・解決したみてえだぞ？」

「早いな。」

「そりゃ、工藤新一だから!！」

「へいへい・・・」

コイツの工藤新一好きぶりにはもう驚かねえぞ・・・。

「あ!工藤新一!！」

全力で走ったのか、少々息が荒れ気味の工藤新一。

そして、なぜか彼女の元へ来て

「蘭・・・俺と、結婚してくださいっ」

「・・・はいっ！」

パチパチ・・・

周りから盛大な拍手。

う、嘘だろ・・・？



「ぶ、どんまっ、一樹・・・」

工藤新一は彼女に指輪をはめ込む。

「一樹、初恋は実らないってもんさ……」

「てめえに言われるとムカツク……」

「せつかく慰めてんの……」

「うるせえ。」

工藤新一から指輪を受け取った彼女の笑顔は

一生忘れない……。

(後書き)

蘭を好きになった男の子視点で書いたこのなかったなあ  
と書いて書きました。

読んでくださって、有難うございました!!

桜桃

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1744v/>

---

届き先のないラブレター

2011年10月7日03時31分発行